
Persona Cross Over World

kumap

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Persona Cross Over World

【Nコード】

N6231X

【作者名】

kumap

【あらすじ】

2012年5月2日鳴上悠は稲羽市に戻ってきた大切な仲間と幸せの団欒を過ごすために……。しかしそれはある一人の男に壊される。

同刻、双子はある目的のために人でなしと罪人に裁きを下すために動いていた。

それは稲羽市にまで及んでしまう。

どうも、最近小説の内容が定まらないkumapです。
やっとう頭に浮かんできた話をまとめて書き上げます。どろどろゆるゆる
おねいします。

これはP4とP3のクロスオーバーストーリーです。

ハジマリ

ある男に一通の手紙が届いた。
書いてある文章は。

『ツギハ、オマエダ』

その一行だけだった。

「なんだ？何かの嫌がらせか？」

その翌日男は人間には不可能なやり方で殺されていた。

「そろそろ、あいつが着く頃、手厚く出迎えないとな……」

白い無地の仮面に黒いマントをまとった男が死体をまたいで闇に溶けて消えてしまった。

おかえり。

「!?!」

今の声で目が覚め窓を見やる。

『次は稲羽市です』

「もう着いたのか、早いな」

駅を出てすぐ。

「あゝいぼ〜!!」

>案の定。

少し笑みがこぼれてそれが笑顔に変わる。

「久しぶりだなみんな!」

それは束の間の幸せだった。

堂島家 夕方

>ガラッ

「あつ！お兄ちゃん！！」

たたと玄関に駆け寄ってきた女の子は俺の顔を見るとぱあつと笑顔になり。

「お帰り、お兄ちゃん！」（ぼふっ）

「ただいま。」

そのあと堂島家で陽介たちが祝ってくれた。

……千枝たちが作った料理も食べれるようになったな……

「さてと、明日は早起きして菜々子とジュネスに遊びに行くか」

>霧？どこだ、ここ

目を覚ましたら青黒い霧の中、妙に気分が悪い。

>>鳴上 悠。

>！？ 誰だ！

自分の声に聞こえて驚愕しながらあたりを見渡す

いつの間にか目の前に大きな影が立ちはだかり自分を見下ろしているように見えた。

その姿はマントのようなものを着ているように見える、霧が濃くてよくわからない。

>>我が名は宴。^{えん} 鳴上、汝に試練を与えよう。

> 試練？

>>私は“人殺しの鬼”と人々に言われている。

>まさか、この頃テレビで騒いでいる不可能殺人の呼び名

>>まあそのようなものだな……鏡に触れる

>………？何？

>>そろそろ時間だ、せいぜい頑張るんだな。

ばふっ

「………！なんだったんだ今の夢。」

鏡に触れる

あの言葉を耳に眠りに落ちた

イギョウフタバヒ(前書き)

初めての挿絵投票ですペイントorマウス書き

イギヨウフタバ

堂島家 朝

「 う…………ん。」「目を覚まして時計を見やる

7:26 いつもより起きるのが遅かったようだ。

「やべっ菜々子に謝んなきゃ」

起き上がると同時に

ガチャ

「お兄ちゃん起きた？」

菜々子が入ってきた

「ああ。ごめん、寝坊した」

「うん。あのね起こそうと思っただらひとがきてお兄ちゃんにこれわ
たしてって」言いながら右手に持っていた封筒を差し出す。

「ああ、有難う仕度はすんだ？」

受け取り聞く

「うん、パン焼く？」

「うん一枚でね」

「分かった、下で待ってる」

パタン

> 見てみるか

封筒を開け中身を見てみる。

内容の文字には新聞紙の文字ではってあった。

鳴上悠への挑戦状

『この封筒を開けた瞬間からペルソナ使い達以外の時は止まり君たちと刺客の時間となる。』

時を動かしたかったらこの挑戦を受けることだ。

玄関を出れば受けたと見る。

では健闘を祈る。』

宴えん

「ふざけるなっ」

バンッ

悠は思いつきり手紙をテーブルに叩きつけた。

>せっかく平和を取り戻したというのに、また。

そう思ってたつていたところ……今の非現実的な時間に聞くはずのない声が悠を呼んだ。

「おにーちゃんまだー？」

「!?!」

>な、なぜ菜々子が!?!

堂島家 一階

焦る気持ちを抑え階段を駆け下りる。

ガッッ

「うわっ……」 ドンッ 「うう」

駆け下りるスピードが狂いつまずいて階段から落ちた。

「あっ、お兄ちゃんだいじょうぶ？」

菜々子が駆け寄ってくる

「…うん、痛いけど大丈夫」

「よかった、きおつけてね…あれ？」

後ろを振り向いて菜々子がつぶやく

「パンまだ焼けないのかな？」

菜々子がテーブルに近寄ろうとすると。

ドンドンッ

「俺が出るよ」

>危険な相手かもしれない慎重にいこう

「誰ですか？」

『おう、鳴上!』

「陽介!?!」

ガラガラ

玄関を開けると青黒い霧が滝のように入ってきた。

「うわっ!？」

「鳴上!メガネ!メガネ!」

>メガネ?そういえばいつもここに入れてたはず。

そう思いながら胸ポケットに手を入れる

指先に何かが当たった あった

取り出してメガネをかける。

黒く塗りつぶされた視界がはつきりと見えた。

<http://22267.mitemin.net/i33237/>

困惑した菜々子の声が聞こえた

「お、お兄ちゃん!?!なにもみえないよ!!!」

「あ、陽介ちよつと待っててくれ」

「おう!」

菜々子に駆け寄る

「大丈夫か?」

「うん、お兄ちゃんは見えるの?」

抱きかかえて玄関へ向かう。

堂島家玄関前

「陽介!」

玄関を抜け陽介に駆け寄る。

「ああよかった。

手紙読んだか?」言いながらポケットから手紙を取り出す。

「ああ。読んだ、でも……」

菜々子に目が行ってしまふ。

「…うおっ、すまん気づかなかった……菜々子ちゃんがなんでこの

世界に?」

>?

「世界って?」

「ああ、クマが言ってた、ここは普通の世界じゃなくて“もう一つ

の稲羽市”だとよ。」

> 時が止まったわけではないのか？

「なあ手紙には、俺達以外の時が止まるんじゃないのか？」

うーん、と陽介がうなづいて

「俺にもわからん。でも菜々子ちゃんが来れるってことは…まさか言葉が終わる前に悠が抱いている子供、菜々子が。」

「お兄ちゃん、何にも見えないよ」

不安そうに見上げてくる（菜々子はよく見えないためたぶん見上げて見たのだろう）

陽介が心配そうに菜々子を見た。

「ああ、ごめんなもうちょっと我慢していてくれ。」

とにかくくいつたんジュネスに行こう」

「ああ、分かった、菜々子、怖いと思うけど俺が守るから安心しろ。」

菜々子の緊張した顔が緩む。

「うん。」

ジュネスフードコート

エレベーターは案の定動かなかったため、非常階段を使ってフードコートに着いた。

> この頃動いてなかったからな、あ、足が……

「はあはあ、げふっ……」

陽介も同じ気持ちだろう……

「あ！ やつと来た！ …… って大丈夫？」

疲れて重くなった顔を上げると、さとな 里中 かちえ 千枝が心配そうに顔を覗いてきた。

「あ…… ああ…… だい……… じょうぶ……… だ……… つはあはあ」

> やばい、今後は常に動かないと…体が付いて行かない。

「全然大丈夫って顔じゃないよ」

今度は天城 あめぎ 雪子 ゆきこ が話しかけきた。

そんな話をしていると。

「で、なんで菜々子ちゃんが？」

千枝が疑問を示したのでみんなのところへ行き事情とここまで経緯を話した。

「それ早く言ってくれクマよ、待っててね〜今作るクマー！」

事情を知ったクマが少し離れたところで作業を始めた。

「ん〜なんでペルソナが覚醒してない菜々子ちゃんがここにいるんだろ？」

そういえば菜々子ちゃんが手紙受け取ったんだよね？」

菜々子のはつきりした声で頷く

「うん、」

「じゃあ渡した人って郵便の人？」

「ううん、くろいぬのをかぶってしろいおめんをしていた変な人だよ。」

> 黒い布？

「え？こちら郵便の人だったんだけど？なんで悠君のうちだけ？」
数秒の沈黙にクマの声が響いた。

「できたクマー！」

クマが菜々子にメガネを渡した、縁がふちピンク色のシンプルメガネだ。

「わあすごーいきれいに見える！」

悠の腕から降りて周りを見渡す。

「これ、クマさんが作ったの？」

「そうクマよ。一生懸命作ったクマー！」
ぽんつと胸あたりを自慢げに叩く。

「すごーい」

クマと菜々子が話している途中。

ベチヨ

もう聞くことも見ることも無いであろうあの“異形”

「まさか！」

全員が一斉に後ろを振り向いた。

もう会つはすのなひ“異形の怪物”シャドウに悠たちは唾然とした。

イギョウフタバビ(後書き)

いつの間にか2000を超えてた(^| ^ ;)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6231x/>

Persona Cross Over World

2011年10月21日02時04分発行